



JAPAN PRIZE

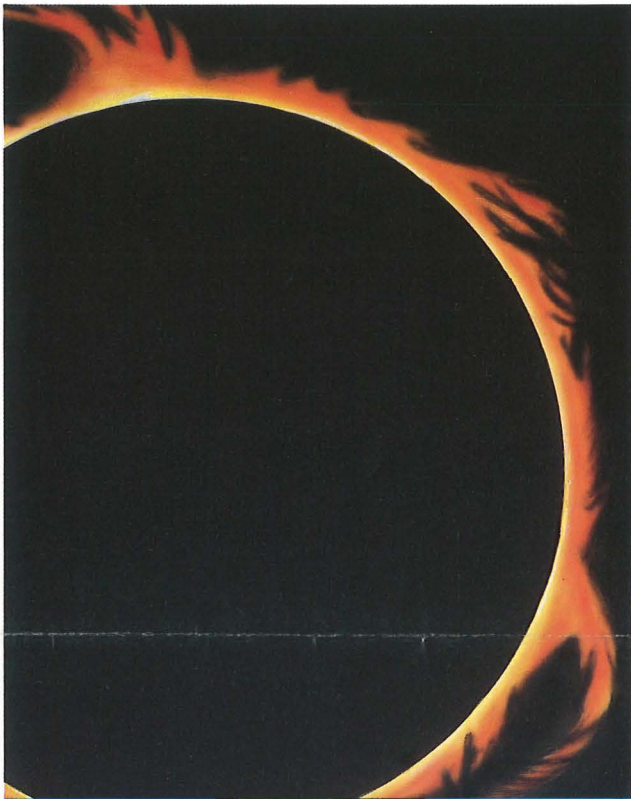
News

1986年12月 No.3

■1988年(第4回)日本国際賞授賞対象分野決まる

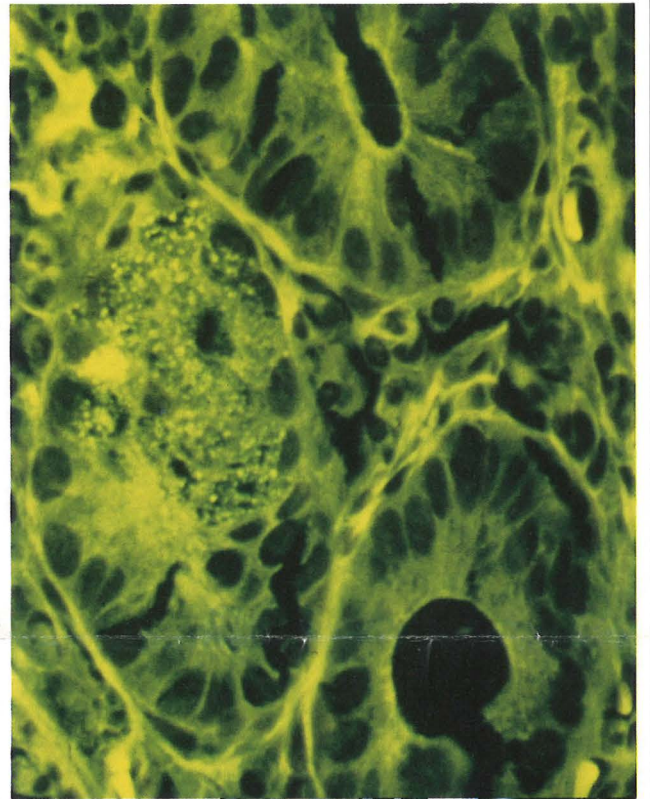
日本国際賞の特色の一つに授賞対象分野の選定があります。1986年11月4日、財団は多くの分野の候補の中から次の2分野を1988年(第4回)の授賞対象分野と決定しました。

【エネルギー技術】



ここでいう「エネルギー技術」とは、エネルギーの生産、貯蔵、変換、伝送、消費に関するすべての技術を意味し、核分裂、核融合、太陽熱、風力、潮力、波力、地熱などに関する技術および省エネルギー技術を含みます。

【予防医学】



ここでいう「予防医学」とは、病原微生物や健康を阻害する物質のような外的因子から身を守るばかりでなく、代謝異常、老化要因や癌などから身を守る医学をいいます。

なお、受賞対象は病原体の発見、発病機序の解明等この領域に大きく貢献した業績も含みます。

JAPAN PRIZE —人類の繁栄と平和のために—

1988年(第4回)の授賞対象分野が 決まるまで

毎年の授賞対象分野の選定は、受賞者の決定にも優るとも劣らない大切な仕事です。

このため財団では本年7月久保亮五氏(元日本学術会議会長)を委員長とする「分野検討委員会」(委員名3頁)を設け、4ヶ月に亘り鋭意検討を行いました。

まず、委員会では日本国際賞の分野について委員同士が十分な意見の交換を行い、共通の理解と認識のもとに各委員から授賞対象分野の候補案を提出してもらいました。140

件に及ぶ多くの分野候補(重複を含めて)が提示されました。

委員会では、それらを集約、整理すると共に世界の新しい科学技術の動向、研究の多種・多様化、社会的影響等々を十分考慮して、第4回日本国際賞に、もっともふさわしい分野として「エネルギー技術」と「予防医学」の2分野を選出しました。

第1回から第3回までの対象分野

1985年(第1回) 情報・通信/医用工学/バイオテクノロジー

1986年(第2回) 材料工学/医療技術

1987年(第3回) 生物改良/エレクトロオプティクス

授賞対象分野のことなど(談)

—分野検討委員会の作業を終えられた久保亮五委員長に3つの質問に答えていただきました。



Q 日本国際賞が毎年分野を変える今までのようなやり方をどう思うか。

特に分野を限定せず本当に新しい突破口を作ったような非常に秀れた業績を適時に選出するというやり方も、確かに一つの方法であり、それなりの意義があると思う。しかし、科学技術は広く、しかも多岐にわたっているのでAの分野とBの分野の業績を比較し甲乙をつけることは困難であるという難点もある。

もう一つの考え方として日本国際賞の今までのやり方、即ちその時代で最も重要——発展しつつある分野で人類の将来に貢献する——と思われる分野を予め選定する方法がある。今回もこの考え方で2つの分野を選出した。

しかし、私は分野についての決め方は、あまり固定せず時としては両者を併用するなど柔軟に対処することも考えられると思う。

Q 科学のベースとしての「フィジカルサイエンス」と「バイオリジカルサイエンス」に大別することが考えられるが、このベースにそって選出したのか。

科学技術をこのような2大領域に分類する考え方は一応常識的で、バランスをとるための基準としてよいと思う。

しかし、この2つの領域の相対的な大きさとか、重要性は比較しがたい。そればかりでなく、両者の境界や区別も、そうハッキリしたものではない。

さらにまた、これからの先端的科学技術の発展は境界領

域にあることを考えればフィジカルとカンバイオリジカルとかの区別にはあまり拘泥しない方がよい。例えば今日の医療技術の発展は物理、化学の成果を取り入れたことに大きく依存している。

Q 今回(第4回)の2分野を選んだ意義等について

まず「エネルギー技術」であるが、石油危機の影が薄れて新しいエネルギーの開拓は当面の緊急課題とは受けとられない向もあるが、化石資源は有限であり、一方、エネルギーの消費は今後も増大していく。

新しいエネルギーの開拓と省エネルギーの研究は人類の生存にとって最も重要な課題だ。ただ、エネルギーの研究には、そうそう斬新なアイデアは少く、むしろ、地味な研究が本道であろうから、選考はなかなか容易ではなさそうに思われる。

エネルギー技術は経済、社会との関連が特に重要になるがその観点からの評価には、長期的なものが必要ではなかろうか。

次に「予防医学」は私自身の専門からは遠いのであまりコメントできないが、病気を治すこと以上に予防が大切であることは誰も認識している。予防医学が人間の幸福や福祉の面からも重要な問題であるので、昨今特に脚光を浴びてきた。この分野も、ノーベル賞の医学・生理学賞と重複するものがないわけではないが、違った観点からの選考の仕方があるはずである。

(元 日本学術会議会長。昭和48年文化勲章受賞)

日本国際賞創設の頃

評議員会議長 名 取 禮 二



私が国際科学技術財団の評議員をお引き受けしたのは昭和58年3月でありました。

その頃、財団はまだ「日本国際賞準備財団」と称して、日本国際賞をどのようにして創り上げていくか、具体策の模索を続けている時代でありました。やがて財団は「国際科学技術財団」と名称を変更し、その基礎を着々と固めてまいりました。

日本で初めて誕生する大型の国際賞に対して、閣議においても関心を寄せられ、創設の意義を認めて「…その実施に関し、関係行政機関は必要な協力を行うものとする。」旨の破格な閣議了解をいただきました。

昭和60年に開催される筑波の科学万博に歩調を合わせて、同年に第1回の授賞式を挙げるべく準備が進められましたが、その指針となったのはノーベル賞でありました。

1901年に第1回の授賞を行ない、その後世界的権威として長年にわたる豊富な経験を有するノーベル賞を模範とすべく、横田理事長がノーベル財団との交流を進められました。それ以来ノーベル財団とは友好と協力との深い絆に結ばれて今日に至っております。

創設の労苦は其後も続きましたが、ようやく一つの形が出来上りました。

昭和60年4月20日、第1回の授賞式が皇太子・同妃両殿下の御臨席を得て、盛大に挙行されました。中曽根総理大臣、ノーベル財団ラメル理事長等の祝辞を聞きながら、財団各位の努力がようやく実を結んだことを痛感しました。

財団は其後も堅実な歩みを進め、本年4月には第2回の受賞者を出し、更に現在第3回の受賞者の選考が慎重に進められています。このように順調に今日を迎えられたのも各界各層の方々の御協力と温かい励ましに負うところが多く、評議員として心から感謝を申し上げたいと思います。

日本国際賞の前途を考えますと、これからが本当の正念場を迎えるのではないかと思われます。したがって私共は日本国際賞の究極の目的である科学技術の進歩を通じて人類の平和と繁栄に貢献することを常に思い起してそれに応えるように心を新たにしなければならぬと思っております。

(東京慈恵会医科大学理事長。昭和61年文化勲章受賞)

■ 分野検討委員会委員

委員長

久保亮五 慶応義塾大学理工学部 教授

副委員長

長倉三郎 岡崎国立共同研究機構 機構長

杉村 隆 国立がんセンター 総長

伊東俊太郎 東京大学教養学部 教授

石井威望 東京大学工学部 教授

原田 宏 筑波大学生物科学系 教授

木村 繁 エーセイ・チャンネル 常務取締役

森谷正規 野村総合研究所技術調査部 副部長

後藤英一 東京大学理学部 教授

生駒俊明 東京大学生産技術研究所 教授

松尾弘毅 宇宙科学研究システム研究系 教授

永野三郎 東京大学教養学部 教授

斎藤軍治 東京大学物性研究所 助教授

西村 暹 国立がんセンター研究所生物物理 部長

大谷 明 国立予防衛生研究所ウィルスリケッチャ 部長

高久史磨 東京大学医学部第3内科 教授

児玉 徹 東京大学農学部 教授

荒井綜一 東京大学農学部 助教授

1987年(第3回)日本国際賞の授賞式

第3回の日本国際賞の受賞者について、審査委員会は目下、慎重にその選考を進めていますが、受賞者(生物改良及びエレクトロ オプテックスの2分野)の発表は来年2月中旬頃になる見通しです。

授賞式は来年4月14日(火)東京の国立劇場において挙行することが決まりました。この4月14日の授賞式を中心としてジャパン プライズ・ウィークを設け、受賞者の栄誉を讃えて、講演会、学術懇談会等の数々の記念行事を行います。

1988年(第4回)授賞候補者の推薦のお願い

第4回の方針が決まったので、この2分野に対する授賞候補者の推薦のお願いは、来年早々世界各国の有識者に送付します。推薦の締切は来年の4月30日です。

推薦の依頼を受けた方は、この分野についての授賞候補者を多数、ご推薦くださるようお願いいたします。

表紙写真提供：日本原子力文化振興財団(左下左)、新エネルギー総合開発機構(左下中・左下右)、電子技術総合研究所(右上)、松下記念病院(右下左)

日本国際賞と国際科学技術財団

日本国際賞

この賞は、科学技術の分野において独創的・飛躍的な成果をあげ、科学技術の進歩に大きく寄与し、人類の繁栄と平和に著しく貢献した人に与えられます。

- 授賞対象分野を毎年指定し、各国の有識者に対して授賞候補者の推薦を求めます。
- 原則として個人を受賞の対象とし、毎年2人に与えられます。
- 受賞者は国籍、人種、信条、社会的身分等を問いません。
- 受賞者には、賞状、メダルおよび賞金5,000万円が贈られます。
- 授賞式は毎年4月東京で行われます。

今までの受賞者

1985年(第1回)

「情報・通信」	ジョン・R.ピアース博士 スタンフォード大学客員教授(アメリカ)
「バイオテクノロジー」	E.カチャルスキー・カツォール博士 テルアビブ大学教授(イスラエル)

1986年(第2回)

「材料工学」	デビッド・ターンブル博士 ハーバード大学教授(アメリカ)
「医療技術」	ウイレム・J.コルフ博士 ユタ大学教授(アメリカ)

記者発表会の開催

11月26日、午後3時から東京の経団連会館において記者発表会を行いました。これは松下電器産業株式会社相談役、松下幸之助氏より当財団に20億円の追加寄付をいただいたことに合わせて、財団の近況を発表したものです。財団から横田理事長、川村常務理事等が出席して次の項目について発表しました。

1. 日本国際賞の基金に対する松下幸之助氏よりの20億円の寄贈
2. 来年の日本国際賞週間(ジャパン プライズウィーク)のスケジュール
3. 1988年(第4回)の授賞対象分野



国際科学技術財団

財団法人国際科学技術財団は総理府、科学技術庁、文部省及び外務省が所管する公益法人です。

「人類の平和と繁栄が、すべての人々にとって共通の願望であることに鑑み、これに貢献する科学技術の進歩を目指して、その研究を奨励すると共に科学技術に関する知識及び思想の総合的な普及啓発を図ることを目的として設立されました。

科学技術の普及啓発のため種々の事業を行っていますが、日本国際賞の授与は財団が最も力を入れている事業です。



第2回受賞者記念講演会(東京)

財団の主な歩みは次のとおりです。

- 1982年11月1日 内閣総理大臣の許可により、「財団法人日本国際賞準備財団」設立
- 1983年5月5日 「財団法人国際科学技術財団」と名称変更
- 1983年10月28日 「日本国際賞の創設について」の閣議了解
- 1985年4月20日 第1回日本国際賞授賞式挙行
- 1986年4月19日 第2回日本国際賞授賞式挙行

日本国際賞の創設について

財団法人国際科学技術財団が授与する日本国際賞が、人類の平和と繁栄のために科学技術が果たす役割についての認識を深め、広く人類の発展に寄与しようとするものであることにかんがみ、その実施に関し関係行政機関は、必要な協力を行うものとする。
(昭和58年10月28日 閣議了解)

財団のある東京の日比谷公園もすっかり冬景色となりました。ニューズレター第3号をお届けします。

松下幸之助氏から追加のご寄付をいただき日本国際賞をますます立派な賞に育てあげたいと財団関係者一同心を新たにしております。(編集部)

財団法人国際科学技術財団

THE SCIENCE AND TECHNOLOGY FOUNDATION OF JAPAN (JSTF)

〒100 東京都千代田区日比谷公園1番3号 市政会館内 電話03(508)7691(代)